

アセスメント(2) 知能・発達のアセスメント

外国につながるのある子ども達への
知能・発達検査の活用と留意点

神谷 真巳

豊田市こども発達センター 臨床心理士

【発行】

国立障害者リハビリテーションセンター 企画・情報部
発達障害情報・支援センター

お話の内容

1. はじめに
2. 日本で実施されている主な検査の概要
3. 実施方法の留意点
4. 結果の解釈
5. 社会適応能力のアセスメント
6. まとめ

1. はじめに

◆ 国際的診断基準(ICD-11 DSM-V)

知能の評価 = 知的能力 + 社会適応

◆ 知能・発達検査及び社会適応能力検査

日本語や日本の文化的背景を前提として標準化
妥当性に課題

◆ 支援級に在籍している子ども5.4%

日本語指導が必要な児童生徒数	支援学級在籍児 (%)	小中学校 支援学級在籍率%
51510	2793(5.4)	3.9

(令和5年度学校基本調査による)

◆ 外国につながるのある子どもたちの障がい種別

知的障がい > 自閉症・情緒障がい

知的能力のアセスメントの困難さが課題

障がい	人数 n=215(%)	公立小中学校 (%)
知的障がい	132(61.4)	45.7
自閉・情緒	72(33.5)	50.0
言語	6(2.8)	0.5
その他	5(2.3)	3.8

(令和2年度全国特別支援学級通級指導教室設置学校長協会調査
および令和2年度学校基本調査による)

2. 日本で実施されている主な知能・発達検査

<発達検査>

- (1) 遠城寺式乳幼児分析的発達検査
- (2) KIDS:Kinder Infant Development Scale
- (3) 新版K式発達検査

<知能検査>

- (1) 田中ビネー知能検査
- (2) Wechsler知能検査
- (3) K-ABC:Kaufman Assessment Battery for Children

2-1. 発達検査の概要

(1) 遠城寺式乳幼児分析的発達検査

対象年齢: 0歳から4歳7か月

領域 : 移動運動/手の運動/基本的生活習慣
対人関係/発語/言語理解

(2) KIDS

対象年齢: 0歳1ヶ月から6歳11ヶ月

領域 : 運動/操作/理解言語/表出言語/概念/対子ども社会性
対成人社会性/しつけ/食事

(3) 新版K式発達検査

対象年齢: 0歳から成人まで

領域 : 姿勢・運動/認知・適応/言語・社会

2-2. 知能検査の概要

(1) 田中ビナーV知能検査

対象年齢: 2歳～成人

検査項目: 各年齢で特異的にできるようになる課題を選定

知能指数: 比IQにより算出 (VI からは偏差IQ採用)

非言語問題: **模写**/**視覚的記憶**/**図形**など

2-2. 知能検査の概要

(2) Wechsler知能検査 : Wechsler Intelligence Scales

対象年齢: WIPPSI 2歳6ヶ月～ 7歳3ヶ月

WISC 5歳0ヶ月～16歳11ヶ月

WAIS 16歳0ヶ月～90歳11ヶ月

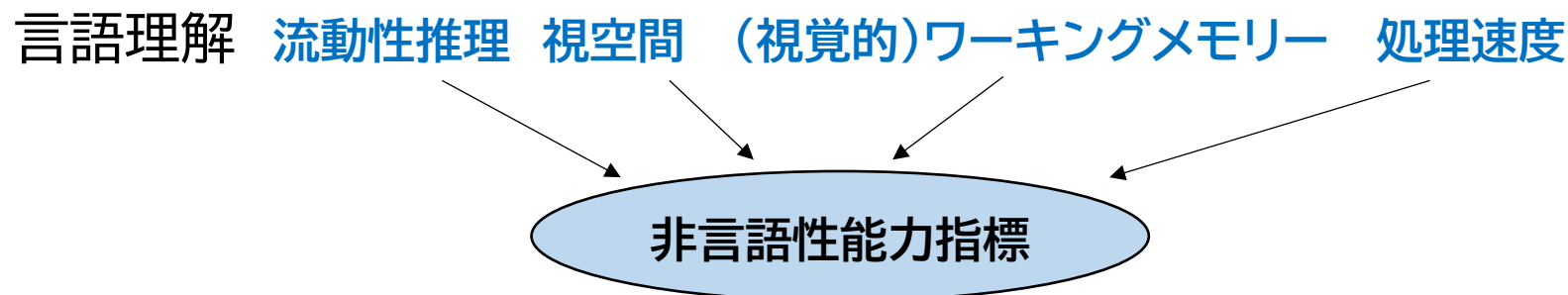
検査項目: 全年齢で知能因子理論に基づいて3～5領域の知能を測定

知能指数: 偏差IQにより算出

※母語が日本語でない子どもたちの知能を推定するには**非言語性能力指標が有益**

2-2. 知能検査の概要

WISC- V 非言語性能力指標



<構成する4つの指標>

流動性推理: 知能の根幹

新しい課題について効率的かつ柔軟に解決する力
直観的に推理する力

視空間: 見たことに基づいて考えを膨らませ問題解決に活用する力

ワーキングメモリー: 一時的な記憶力であり、集中力や注意力の源となる力

処理速度: 慣れている課題や作業を正確かつ要領よく速やかに進める力
(筆記・集中意欲の維持持続)

2-2. 知能検査の概要

(3) KABC-II :

Kaufman Assessment Battery for Children Second Edition

対象年齢: 2歳6ヶ月～18歳11ヶ月

検査項目: 認知・習得

結果分析: 知能の評価

認知特性と基礎学力の評価

※ 日本語が母語でない子どもたちの能力を推定するための**非言語尺度が有益**

2-2. 知能検査の概要

KABC-II の非言語尺度

認知尺度：認知処理能力



継次 同時 計画 学習



非言語尺度

習得尺度：基礎的学力の一部



語彙/読み/書き/算数

継次：連続した刺激をひとつずつ順番に処理する力

同時：複数の刺激をまとめて、全体として捉える力

計画：課題を解決するために、適切な方法を選択、実行、チェックする力

3-1. 実施方法の留意点

<実施の時期>

- ・ 子どもが日本の生活に慣れたころ
Ex: 生活の見通しが立つ、リラックスした表情や態度
- ・ 読み書きの評価は日本語環境で少なくとも3年経過後に実施

(西尾;2023)

- ・ 一定期間を空けて、継続的に実施

<実施する時間帯>

- ・ 退園後や下校後を避ける
- ・ 子どもとその家族の生活時間帯を加味して設定

3-2. 検査実施の留意点

- ◆ 日本語の理解度を把握する
通常の教示 ⇒ わかりやすい教示
教示を省略したりヒントを与えることは控える
- ◆ 実施順序の調整
- ◆ 通訳者を介す場合:検査の意図と注意点をあらかじめ伝える
実施時間が長時間になる場合は休憩を挟む
言語的・文化的影響を確認
- ◆ 課題によって答えやすい言語が異なる
実施言語を記録
数字を唱える課題では、流暢に唱えられる言語で実施

4. 結果の解釈

- ◆ 発達・知能指数は参考値としてとらえる

- ◆ 文化負荷量・言語要求度に着目

(島田;2016)

文化・言語の影響を受ける領域 < 受けにくい領域
本来の子どもの力ではなく 解釈を慎重に行う

- ◆ WISC-V の非言語性能力指標、KABC- II の非言語尺度を活用

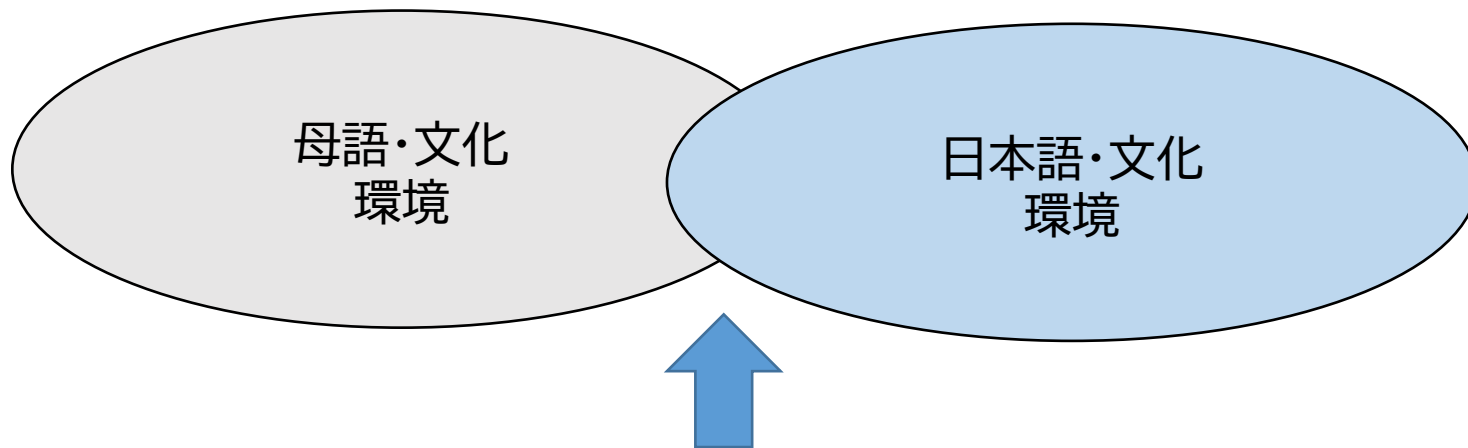
- ◆ 標準より高い結果でも支援が必要でないとは言い切れない

4. 結果の解釈

<検査場面>

定性的な視点を加える

<日常生活>



どちらの環境でも見られる様子に焦点を当てる

5. 社会適応能力のアセスメント

1. 検査

(1) Vineland-Ⅱ適応行動尺度

対象年齢: 0歳から92歳

評価領域: コミュニケーション/日常生活スキル/社会性/運動スキル

(2) S-M社会生活能力検査

対象年齢: 1歳から13歳0ヶ月

評価領域: 身辺自立/移動/作業/コミュニケーション/集団参加/自己統制

5. 社会適応能力のアセスメント

2. 日常の様子からのアセスメント

母語の能力、好む遊び、絵などの作品、生活のスキル

3. 生育歴の聞き取りから、遅れの有無を推定

母語環境での始語の時期

文字習得の開始時期

生活習慣の獲得時期など

まとめ

- ◆ 知能発達検査の実施では言語の影響を極力排除した非言語能力で推察することができる。
- ◆ 知的発達の遅れは、発達指数や知能指数だけでなく、日常生活能力のアセスメント、母語の発達を合わせて判断する。
- ◆ 総合的かつ慎重なアセスメントを通して子どもの困難さを理解し支援方法を考える手立てとして活用 されることが求められる。